

事例 2 生活介護事業所に通う Bさんの事例

(1) 利用者のプロフィール

氏名: Bさん

性別: 男性

年齢: 21歳

生活環境: 自宅(集合住宅の持ち家、3LDK)

障害支援区分: 6

(2) 生活歴および家族構成

出生後、首のすわりが遅いことから受診したところ、脳室周囲白質軟化症(PVL)と診断される。幼児期は療育センターに通い、療育やリハビリテーションを受けて過ごす。小学校は、両親のはたらきかけにより教育委員会の理解を得て、地域の普通学級に就学する。小学校では、てんかん発作による欠席が多かったため、学内の医療職の配置状況を理由に、小学校卒業を機に肢体不自由特別支援学校中等部へ転校した。

てんかん発作はその後みられず、安定して通学し、同校の高等部に進学する。特別支援学校卒業後の進路として、本人は大学進学を希望していたが、両親や学校の進路指導の影響もあり、実習先であった生活介護事業所の利用を選択した。生活介護を利用しながら社会人としての生活が始まり、将来に向けて、いろいろな人と人間関係を深めながら、キャリアを積んでいきたいと考えている。

家族構成: 父…同居(55歳)、就労している。

母…同居(50歳)、就労している。

兄弟…なし。

(3) 現在の状況

■健康状態

(1) 身長等

- ・身長: 160cm くらい
- ・体重: 50kg くらい
- ・BMI: 19.5

(2) 平常時のバイタルサイン

- ・体温 : 36.5℃
 - ・呼吸: 18～22 回/分
 - ・脈拍: 65～75 回/分
 - ・血圧: 130/84mmHg
- (3) 障害の状況
- ・四肢麻痺
- (4) 現在の主な疾患
- ・脳室周囲白質軟化症 (PVL)
- (5) 既往歴
- ・てんかん
- (6) 服薬
- ・特になし
- (7) 精神状態
- ・突発的な大きな音が苦手で、何か大きな音がすると不安になり、テーブルに伏せてしまう。
 - ・対人関係に緊張があり(特に異性)、慣れた人でないと意思をうまく伝えられない。
- (8) 視力
- ・日常生活において、特に支障はない。
- (9) 聴力
- ・日常生活において、特に支障はない。
 - ・騒がしい環境だと耳が痛くなってしまう。

■日常生活の状況

(1) 移動・移乗、体位変換

- ・電動車いすを使用し、自力で移動が可能だが、細やかな操作ができず、周囲にぶつかりそうになる。そのため、狭い場所を走行する際は、介助者に車いすを押してもらおう。
- ・歩きたいと希望があり、股関節に痛みがないときは、SRC ウォーカーと短下肢装具を使用して、介助者が身体を支えれば、数メートル歩行できる。
- ・自宅内は手を使い座ったまま移動し、床で生活できる環境にしている。床面では四つ這いで移動可能だが、身体に痛みを感じる時は身体を支える全面的な介助が必要。
- ・車いすから床には自分で降り、床から車いすへの移乗は、身体を抱える全面的な介助が必要。
- ・短時間であれば自力で座位が保てるが、10分程度の座位保持は背もたれが必要になる。
- ・寝返り、起き上がりは何かにつかまればできる。股関節に痛みがあるときは、介助者の介助が必要。
- ・立位は股関節に痛みがないときにはつかまれば可能。

(2) 身じたく

- ・自分で衣服を選ぶことはでき、服のすそについている目印で前後を判断している。指先がうまく使えず、ボタンをうまくとめられなかったり、ズボンを上げることが不十分で服のすそが出ていたりすることがあるため、部分的に介助が必要である。身体に痛みが出ていたり、うまくいかないと、途中でやめてしまうので介助者が衣服の着脱を介助する必要がある。

- ・歯磨きは自分で行うが、磨き残しがあるため、介助者が磨き直す必要がある。

(3) 食事

- ・スプーンを使って普通食を自分で食べることができる。魚の骨はうまくとれず、食材によっては食べやすいサイズにされたものを食べている。
- ・一口の量が多く、口の中に詰め込みがある。
- ・飲水はできるが、勢いよく口に入れてしまい、むせることがある。

(4) 排泄

- ・リハビリパンツを使用し、定時にトイレへ行くことを心がけている。
- ・便器への移乗や衣服の上げ下ろしに見守りが必要である。股関節に痛みを感じているときは介助者が抱えて移乗し、ズボンの上げ下ろしも全面的に介助する必要がある。
- ・自宅では床に横になり尿器を使用しているが、排尿後の後始末はできないため介助者が行う。
- ・排便後は自分で拭き取りをするが不十分であるため、介助者がやり直す必要がある。

(5) 入浴・清潔保持

- ・週3回(月・水・金)通所時に入浴している。
- ・土日は、父の介助によって自宅で入浴している。
- ・身体の前面は自分で洗おうとするが、うまく洗えないため、介助者がやり直す必要がある。

(6) 睡眠

- ・寝つきはよいが、夜中に目が覚めてしまうと、その後、眠れなくなるときがある。そのときは、自分の今後について考え込んでしまうと話す。

(7) コミュニケーション

- ・慣れた人とであれば、会話によるコミュニケーションが可能で、自分が取り組んでいる自伝の執筆の進捗や好きなアニメのことなど、興味のあることを積極的に話しかけている。
- ・本人の希望を尋ねると、黙ってしまうこともあるが、時間をかけ、表出を促すと話をしてくれることもある。
- ・うつむきがちで無口になってしまうなど、気分にもらがある。

(8) IADL (Instrumental Activities of Daily Living: 手段的日常生活動作)

- ・自宅では、調理や洗濯は家族がしている。
- ・通所先で調理活動に参加してから、自分で調理することに興味がある。
- ・日用品は家族が購入しているが、嗜好品は休日に家族と一緒に外出したときに購入している。
- ・お小遣い程度の金銭管理をしており、自分の好きなアニメグッズの購入に使うことが多い。
- ・物を捨てるのが苦手で、自宅の部屋(6畳)はアニメグッズであふれている。両親に部屋を掃除するように言われると、部分的に掃除をする。
- ・通院は家族が付き添っている。
- ・郵便物は両親と確認している。
- ・家族や事業所に電話をかけることができる。

(9) サービスの利用状況

- ・生活介護サービスを週に5回利用している(月曜～金曜の9時30分～16時)。

■ 経済状況

- ・障害基礎年金（1種1級）を受給している。
- ・両親は就労しているため、経済的な問題はない。

■性格

- ・自分の考えを主張するよりも周囲の考えに影響されやすい。
- ・いろいろな人と話したい気持ちはあるが、人見知りであり、異性に対しては特に緊張してしまう。

■趣味

- ・アニメ鑑賞
- ・アニメグッズなどの買い物へ行くこと
- ・自伝の執筆

■1日の過ごし方

- ・朝7時30分に起床し、23時に就寝している。
- ・家ではアニメを見たり、パソコンを使って自伝を執筆している。

■最近の様子

- ・外出時に、同じ年代の大学生が友達と楽しそうに買い物をしている姿を見て、自由に見える大学生活に憧れを抱いているものの、自分がおかれている環境との違いに悩んでいる。そのことで職員に対して不満をぶつけることがある。
- ・将来、仕事をして一人暮らしをしたいという気持ちをもっているが、両親からは難しいことを伝えられ、なぜ大学に行けずに生活介護を利用しているのか、ストレスを感じている。
- ・朝、「体調が悪いから通所を休みたい」という連絡が入ることがあるが、Bさん担当の職員が誘うと、しぶしぶ通所する。しかし、日中活動に対してやる気がなく、一人でテーブルに伏せている姿が目立っている。

■本人の思い

- ・自分の人生は自分で決めたい。できれば大学に行って、いろいろな人と人間関係を深めていきたい。
- ・自立できる姿を見せて、両親に認めてもらい、一人暮らしをしたい。
- ・作業などできることは行い、いずれ仕事に就いて、家庭をもつ暮らしを実現したい。

■家族等の要望

- ・両親としては、自分たちが元気なうちは一緒に生活ができるが、親がともに倒れたとき、一人で生活ができるか心配している。
- ・将来、本人が好きなパソコンを使用して、就労につながる生活ができれば理想だが、今の本人の身体の状態や生活の様子では難しいと思っている。親亡き後に備えて、短期入所の利用を勧め、施設に入ることが本人の安心できる生活になると考えている。
- ・今は、生活介護を安定して利用することで、本人なりの生活リズムを確立してほしい。

・人とのコミュニケーションが苦手なため、対人コミュニケーション力をつけて、精神的に自立してほしい。

■関係者の意見

・本人が考えている将来像と現在の生活の様子に乖離があり、家族の意向とのずれもあることから、職員に対して不満をぶつけることがある。到達できる小さな目標を一つひとつ家族と共有しながら支援する必要がある（サービス管理責任者）。